東京経済大学

人文自然科学論集

No. 7

クルィローフ（И. А. Крылов 1769～1844年）の寓意詩
——とくに，1820年代前半のものについて——　吉原　武安（1）

ヘッセの初期作品（I）　長尾　伸（29）

<一般豪農層思想・意識の綜合研究②>
石　公　歴　論　色川　大吉（45）

Sport badge test についての一考察　多田　謹次（107）

研究会報　人文自然科学会 自然科学懇談会（141）

1965・1

研究会報

人文自然科学会

今期まで例会は次のように開かれた。

第25回例会　昭和38年12月

報告者　荒川幾男

論　題　官僚制的人間の問題

第26回例会　昭和39年10月23日

報告者　中　秀男

3月28日から9月26日までの，東・北・西欧外遊の帰朝報告が行なわれた。

第27回例会　昭和39年11月6日

報告者　神保規一

3月15日から10月6日までの，中近東から西欧，合衆国外遊の帰朝報告が行なわれた。

第28回例会　昭和39年12月18日

報告者　山崎　勉

論　題　ウィリアム・ゴールディングの文学——現代イギリス文学の一側面——

要　旨　「ひょっとすると自分の力に負えないかも知れないような仕事をするか，或いは自分以外の誰もまだ試みたことがないと思われるようなものを書くのでなければ，小説を作る意味は全然ないと思う。互いに似たような本を二冊書いたところで無意味なことだ」

ゴールディング自身の言葉である。相当に気負った響きがある。またある所で彼はいわゆる文壇から孤立した存在であったことをむしろ喜び，その御蔭で「意味深い文学」を書き続けることができたと述懐している。こうした言葉の端々から，現代英文学に対する彼の強い不満と，自己の文学によせる並々ならぬ信念が読みとれよう。

イギリス文学が明確な一つの戦後文学として定着したのは五十年代の半ばからだが，当時，「怒れる若者たち」とか「ムーヴメント」とか「新ピカレスク」などさまざまなレッテルを貼られながら，一種の「神話」が成立しつつあったことは記憶に新しい。たしかに，ある批評家が指摘するとおり，二十年代が Eliot と Pound に，三十年代が Auden と Spender に，そして四十年代が，D. Thomas に代表されるという意味で，Philip Larkin, John Wain, Iris Murdoch, Kingsley Amis など，これら一連の若者たちが五十年代を代表するとみるのは当っている。彼らは殆んどすべて中産階級かそれ以下の出身で，一様に反階級的な姿勢と因襲への抵抗，進歩的自由主義など，いわば社会的な関心を軸に，度を越さぬ風刺とユーモア，幾分滑稽な自己疎外，物語の快適な運びと手際よい写実などで人を惹きつけた。二，三十年代の偉大な先人たちが残した輝かしい文学遺産を否定するところで彼らの文学は成り立つていた。そこには文体の美学も，手法の実験も思想の重厚さもなかったが，一部の批評家からはその文学的保守性のゆえにかえって小説の健康をとり戻す兆とみなされた。事実，小説は「面白く」なったし，一種の新鮮な驚きさえ読者に与えたのである。

ゴールディングが作家として著名になったのは第一作「蠅の王様」を出した一九五四年で，すでに四十三才だった。それ以後彼は着実に活動を続けているが，その期間はちょうど今述べた五十年代の文学風土と重なる。だが，彼の文学はそれとは全く無縁なところで成立している。流行作家ではなく問題作家として，彼は文壇とは遠く離れて自分だけの道を真摯

に歩み続けてきた。そして，当時からすでに十年近くを隔てて眺めてみるとき，「怒れる若者たち」の文学が幾分古びてしまった感があるのに対し，彼の文学がその他二，三の孤独な作家たちのそれと共に，今なお不思議な魅力と説得力を持ち続けていることは，文学なるものの本質をついているように思われる。

ゴールディングの文学は一見現代のアクチュアリテイとは無縁であるが，実は彼の作品ほど現代の苦悩と深いところで関り合っている例は少いのではないか。

ゴールディングは反時代性を標榜することによって実に現代的であろうとしているようだ。彼が自らの文学を「意味深い文学」と名づけたとき，彼の野心は現代の情況に対する形而上学を提出することだった。彼の作品はすべて物語の背後に複雑な道徳的含意をこめた寓話である。彼は小説の中に，イギリス文学の伝統的な一つの方法—アレゴリイをとり戻すことによって小説を堕落した状態から救おうとする。しかも極めて意識的な芸術的意匠のもとにだ。

第一作「蠅の王様」は飛行機事故によって南海の孤島に投げ出された一団のイギリス少年の生存と救出の物語であるが，中心テーマは人間存在の根源的なパターンを提示することにある。「後継者たち」ではネアンデルタールがホモ・サピエンスによって亡ぼされる過程が描かれ，「生存」に内在する「悪」の追求をテーマとしている。「ピンチャー・マーチン」では北大西洋の岩礁に打ち上げられた一海軍々人の「生存」への意志と闘争を通じて，神による窮極的な救済の問題を象徴的に語る。「自由なる転落」は芸術家の自伝的な回想記という形をかりて，魂の自由に関するファウスト的なテーマをとり上げる。最近作「尖塔」は中世の教会を舞台に尖塔構築をめぐって展開される物語であるが，ここでは固定観念に拘われた人間の意志が神と人間全体に対して犯す罪を一人の僧の内面検証として追求される。

このように，彼の文学は読者に向って人間とは何かという間接話法で発し続ける。彼は現代社会が直面する諸々の欠陥に強い関心を向けるが，それらを政治・経済・社会制度などの外的な理由によるものとはしないで，人間性に内存する「悪」の顕示と見る。「蠅の王様」について「これは社会の欠陥を人間性の欠陥にまでさかのぼって跡づけようとする一つの試み」であると述べている。そして彼にあっては悪の観念は極めて正統的なキリスト教のそれであって，根本的には神に背いた人間の原罪を意味する。

彼は第二次大戦に従軍し，そこで決定的にペシミストとなったと述べている。終戦後十年，第一作「蠅の王様」をひっさげて登場するまで，彼は恐らく人間性を問うことだけに生涯をかけるつもりで納得のいく答えが煮つまるまで沈黙を守った。そしてたどりついたのが結局キリスト教であった。そういう意味で，回帰すべき思想的故郷を持つた彼(ら)の文学と，いわば裸一貫で自己の体験のみを手がかりに生の意味を問わなければならなかった我が国の第一次戦後派の文学とを比較するとき，さまざまの興味ある問題が提起されるであろう。

自然科学懇談会

会員の動向

38年度には，井尻，石田，内田，39年度には矢島の各氏が新任により会員に加わった。39年7月河合氏が不慮の事故に

あい逝去されたことは痛惜に耐えない。

第8回研究会　昭和38年11月10日

報告者　石田　望

論　題　態度測定(Attitude Measurement)　に関する1つの実験一則”に対する高校生の態度の数量化の試みについて—内容は，人文自然科学論集No. 4. に発表の論文をみられたい。

第9回研究会　昭和38年12月20日

報告者　内田星美

論　題　中南米の自然と産業について

第10回研究会　昭和39年5月14日

報告者　大沼正則

論　題　産業命革期における科学と技術—諸ガスの発見について—

今日知られている炭酸ガス，水素ガス酸素ガスは，ことごとくが18世紀後半イギリスで発見された。この時期は化学史上，「気体化学の時代」といわれているが，一方でこの時期はイギリス産業革命開始の時期にあたる。

ところが，これまでの化学史では，ガス発見の評価は，たんにその理論的側面にのみ限られていた。すなわち，以前どのガスもすべてAirとよばれ大気の一変種としてしか考えられなかったが，この時期においてはじめて大気との質的区別（定量的測定による）がおこなわれた，というのである。

しかし報告者は，ガス発見のみちすじ（ジョセフ・ブラックの炭酸ガス発見の過程）を述べながら，理論的，思想的評価（たとえばブラックの定量的方法の意味）を与えたのみならず，その際使用された材料（炭酸ガスの場合では石灰石とか炭酸マグネシウム）が，当時のどのような産業からもたらされたか，（炭酸マグネシウムはスコットランドのプレストンパンスにおける海塩業）とか，ガス発見の過程で実験される化学反応が当時の産業の中でいかなる意義をもつていたか（たとえば，ブラックは，織物の漂白のさいおこなわれていた石灰乳のアルカリを木灰汁で弱める反応を使っている）にふれ，ガスの発見が，当時の産業革命とどのような具体的関連をもっているかを主として述べた。

会報の発行

昭和39年7月26日の研究会において，自然科学懇談会としての会報を発行することを決定した。体裁はタイプ刷20～30頁とし。年1回～2回発行，学内に配布する。人文，経済系の方々に読んでいただくことを重要な発行の主旨としているので，題は『交流』と仮に決定している。第1号は39年末に発行の予定である。（内田記）

昭和40年1月30日　印刷
昭和40年1月31日　発行

（第7号）

（非売品）

編集代表者　石川英夫

編集兼発行人　東京経済大学
人文自然科学論集編集委員会
東京都国分寺市
東京経済大学内

印刷所　松濤印刷株式会社
東京都新宿区早稲田南町37番地

人文自然科学論集　7号　正誤表

ページ	行	誤	正
表紙	8	石公歴論	石坂公歴論
1	みだし 2	1844）年	1844年）
3	18	ラフォンテーヌ	ラ・フォンテーヌ
3	20	公衆図書館	公共図書館
9	27	腐財	腐敗
11	12～13	...и пяти этюдов о баснях Крылова. П. Смирновского. С. -Петербург——1897.	...и пяти этюдов о баснях Крылова. (под ред. П. Смирновского.) С. -Петербург——1897.
16	2	のであった,	のであった。
21	1	дракки	драки
21	24	страствий	странствий
23	13	Огуец	Огурец
28	25	соьраниесочине	собраниесочине
28	28	t.	т.
28	34	1960г,	1960г.
40	20	ようはな	ような

同上8・9合併号　正誤表

ページ	行	誤	正
12	18	単なる	わずかな
12	19	強い	重い
20	11	続続人	相続人
33	1	L	削除
159	5	学科的立場	科学的立場